

# 宮沢賢治記念館通信

発行 T025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36

宮沢賢治記念館

(0198) 31-2319

FAX (0198) 31-2320



宮沢賢治記念館

〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36  
TEL 0198-31-2319

特別展ポスター

ギャラリーコンサート  
8月4日(土)11:00~11:45  
ピアノ 鬼頭瑞希  
ヴァイオリン 宮澤香帆

## 「花壇工作」における宮沢賢治と佐藤隆房

彫刻家 栗原俊明

宮沢賢治の主治医であった、花巻共立病院の佐藤隆房博士の故郷は栃木県那須町湯本である。那須温泉神社の境内には、「新涼や 山彦をきき 又呼びし」の立派な句碑もある。だが、地元那須町でも、博士やその句碑のことを知る者は極めて少ない。



そこで、栃木・宮沢賢治の会〈ぎんどろの会〉では今年6月2日(土)、那須高原ビジターセンターにおいて「宮沢賢治の主治医・佐藤隆房博士について」(企画立案: 小堀博) と題して交流会を開催したのだが、予算がないので、会の代表という立場上、あろうことか素人の私が講話をすることになってしまった。

隆房と関わりのある散文「花壇工作」と詩「眼にて云ふ」の群読をプログラムに加えたので、それらに関するエピソードなども含め、博士の人と

なりを紹介するため関連書籍に目を通していたところ、「花壇工作」での賢治と隆房、二人の心情に大いに興味をそそられた。

花巻共立病院の中庭で花壇作りが行われたのは、大正13年〈四月の初め〉である。賢治はこの年、心象スケッチ『春と修羅』(4月20日)とイーハトヴ童話『注文の多い料理店』(12月1日)の2冊を出版している。「花壇工作」は、『春と修羅』の出版直前ということになる。花巻農学校の教師をしながら精力的に詩や童話を創作し、37年という短い生涯の中で賢治が最も輝いていた時期である。

「花壇工作」本文を見ていく。

〈創造力に充分な自信があった〉賢治（本文では富沢先生）は、〈花でBeethovenのFantasyを描くこともできる〉と考えた。だが、彼のパフォーマンスの大きな障害となったのは、誰であろう院長隆房だった。

そのとき窓に院長が立ってゐた。云つた。  
(どんな花を植ゑるのですか。)

〔中略〕

院長はたうとうこらへ兼ねて靴をはいて下りて來た。  
(どういふ形にするのです?)

そうして、どんどん農夫に指示を与えていく。

だめだだめだ。これではどこにも音楽がない。おれの考へてゐるのは対称はとりながらごく不規則なモザイクにしてその境を一尺のみちに煉瓦をジグザグに埋めてそこへまっ白な石灰をつめこむ。日がまはるたびに煉瓦のジグザグな影も移る。あとは石炭からと鋸屑で花がなくてもひとつの模様をこさへこむ。それなのだ。もう今日はだめだ。設計図を拵へて来て院長室で二人きりで相談しなければだめだと考へた。

院長の登場によって、花壇作りは中止を余儀なくされる。しかし、その要因は隆房にのみあるのだろうか。彼の著書『宮沢賢治—素顔のわが友』

【最新版】(富山房企画)や自叙伝『醫は心に存する』(佐藤進発行)などを読み、花巻共立病院創立の経緯や賢治と隆房の関係性が少しずつ見えてくると、実際の二人の心情が「花壇工作」とは微妙

に異なるように思われてならない。

明治23年栃木県那須村湯本に生まれた佐藤隆房は、千葉医学専門学校（現千葉大学医学部）卒業後、宮城県古川町の片倉病院で外科医長として2年弱勤務したのち、大正6年に花巻は豊沢川の南、根子村荻堀に佐藤外科耳鼻科医院を開業した。その後花巻川口町の財界人や町長、町会議員であった賢治の父宮沢政次郎などと交流し、彼らの協力を得て町の中心部に病院を建設することになる。大正12年春に西公園（現ギンドロ公園）に新築、移転し県立花巻農学校となった稗貫農学校の跡地に、100名余を収容できる立派な総合病院が完成し診療を開始したのは同年11月、「花壇工作」が書かれる5か月のことである。

創立間もない花巻共立病院の中庭の花壇作りである。院長兼外科医長である隆房の思い入れの強さは推して知るべし、口をはさむなと言う方が酷というものだ。まして、〈憐れむべき弱い精神の学士〉は言葉が過ぎよう。だが、〈あんまり過銳な感応体おれを撲ってやりたいと思った。〉と書く賢治も、実は、そういう隆房の気持ちをわかり過ぎるほどわかっていたに違いない。「花壇工作」は、あくまでもアイロニカルな“心象スケッチ”なのである。

『宮沢賢治』の「序」で〈はじめは後輩であり、それから親友となり、逝いて畏友となった賢治さん〉と書き、「友達」の章では、賢治の親友は花巻高女音楽教師の藤原嘉藤治と〈医師の私です。〉と言い切る。〈お互いに尊敬し合わなければならぬ交際です。しかしお互いにチクチクやり合って喜んだり、悲しんだりする間柄です。〉とも述べている。隆房は当初、賢治を〈先輩で私の指導者である宮沢政次郎氏〉(『醫は心に存する』序文)の長男で6歳年下の弟分と見ていたようだが、二人は徐々に親交を深めていったのである。

なお、花壇完成直後の写真を見ると、賢治の意図とは異なり煉瓦は平で並べられている。佐藤進著『賢治の花園—花巻共立病院をめぐる光太郎・隆房—』(地方公論社)によれば、当時釜石鉱山でコーライトという名で製造されていた白色の耐火煉瓦を使用したこと。この煉瓦が並べ方に関係があるかは不明だが、〈ジグザグ〉ではないことに賢治の優しさを感じてしまうのは、賢治ファンの欲目というものだろうか。

と、ここまで書いてきて、36年前、宮沢賢治記

念館のモニュメント「よだかの星彫刻碑」の案を練っていたころの記憶が甦った。袋小路にはまって苦しんでいたとき、宮沢清六さんから手紙が届いたのである。しかも、どこで察したのか絶妙のタイミングで。「他人（ひと）はあれこれ言うでしょうが、気にする必要はありません。あなたは、あなたが作りたいものを作ればいいのです。」この清六さんの言葉に、私はどれほど救われたか知れない。温かく見守ってくださった、清六さんのお陰で「よだか」の彫刻は完成した。ひょっとしたら清六さんは、危なっかしい私にハラハラしながらも、「花壇工作」の轍を踏まぬよう堪えてくださっていたのかもしれない。

## 賢治さんに帆立貝入りスイトンを

料理研究家 中野由貴



宮沢賢治の作品世界や自身のエピソードに登場する食べ物は、賢治の食に関する感覚、その時代、そして東北の食文化や先人の知恵さえ伝えてくれます。

2018年7月宮沢賢治学会イーハトーブセンター開催の夏季特設セミナー「心象スケッチを知っていますか?」に登場した「帆立貝入りのスイトン」もそんな賢治のごちそうの一つでした。「心象スケッチと異空間」がテーマのセミナーは、基調講演と研究発表から「心象スケッチ」の作品群を考察し、朗読によって賢治のことばの世界を堪能するものでした。朗読を「聴く」という感覚は、活字と行間から伝わってくるものとはまるで「異空間」。声となり現れる賢治のことばは一層謎めき、魅力を放っていました。

そんな異空間からやってきた「帆立貝入りスイトン」。現れ出たのは、賢治記念館学芸員の牛崎敏哉さんが朗読された『春と修羅』第三集より「停留所にてスイトンを喫す」。誌面の都合、全文紹介を割愛しますが、賢治全集などを開いてどうぞ味わってみてください。

停留所にいる登場人物（おそらく賢治）は熱もありふらふらでした。この作品には「一九二八、七、二〇」という記述があります。昭和3年、賢治32歳。羅須地人協会の活動も3年目に入り、自炊生活をしながら農業指導や農民たちとの交流を

精力的に行っていた頃です。前月の六月には上京し、水産物調査のために伊豆大島に出かけ、その旅の中で受けた感覚は、「三原三部」という作品に昇華されています。しかし創作への情熱とは反対に、体調はこのころから下り坂。そしてこの七月の「停留所にて……」当時は高熱を出していたのでした。さらにこのあと八月には体調はさらに悪化し入院。以降、実家で療養することになった賢治は、羅須地人協会の活動もだんだんできなくなり、ついにはその活動に終止符が打たれます。それほどにこの時の賢治は調子が悪かったです。

そんな賢治に教え子がわざわざ持ってきたくれた帆立貝入りスイトンは、畑仕事がきつく体力を一番消耗する時期に作って「薬にたべる種類のもの」。今なら薬膳料理です。「幾日も前から心掛けてきみのおっかさんが拵へ」ているので、干し貝柱だろうと私は考えています。それで戻す下準備から丁寧に時間と手間をかけています。栄養について当時どこまで知られていたかはわかりませんが、帆立貝は低脂肪高タンパク。タウリンをはじめ疲労回復効果のあるアミノ酸を多く含んでいます。干した物は栄養素も旨味もさらに凝縮。だから帆立貝入りスイトンは当時の賢治にはうってつけのごちそうだったはずです。

ところでもう一つ気になるのは「スイトン」です。花巻には「ひつみ」というスイトンに似た郷土料理があります。材料も調理法もほぼスイトンと同じですが、花巻ではひつみと呼ぶほうが一般的かと思います。家庭それぞれにおいしいレシピがあります。ひつみの名の由来は、水でこねた小麦粉をひつまんで（ひっぱってつまんで）鍋にいれるから（諸説あります）。できるだけ薄くひつまむのがコツです。基本のひつみは鶏肉や、きのこ、根菜類がはいったすまし仕立てか味噌仕立ての汁ものです。そんな汁に放された生地は、煮えてくると底からゆらゆら浮かんできます。それこそ賢治の言う「雲の形の膠朧体」。

一方、スイトンには戦中戦後、食糧難時の代用食という印象もあります（もちろんそれ以前からあったとは思われますが）。冷涼な東北地方では、小麦粉料理は米食の代用という立場もあり、その背景を考えればひつみと代用食としてのスイトンは同じ……いえいえ。ひつみにはもっと古い歴史があるのです。一説には小麦の栽培が普及したとされる平安時代のころから作られていると言

われ、旧南部藩の領地だった岩手県北中部から青森県南東部にかけて伝わる料理（参照『郷土食とうほく読本』2003年・無明舎出版）。つまり代用食ではなく、長い年月人々のお腹を満足させてきた愛すべき郷土料理。そんな歴史を知るとやっぱり作品に登場しているのは「帆立貝入りひつみ」では？と思うのです。ならば賢治はどうして「スイトン」と呼んだの？ それも「すいとん」でも「水団」でもなく「スイトン」？ 正解は本人にしかわかりませんが、賢治には「スイトン」ということば自体の響きや印象に、詩人としてのことばのアンテナが響いたのではないかでしょうか。朗読を味わった一読者はそんな風に思いを馳せています。

先の夏季セミナーのあと、賢治記念館前の山猫軒で開催された交流会で「帆立貝入りスイトン」をいただきました。店主によると帆立の干し貝柱を生地に練り込み、また出汁を取るのに苦心されたそうです。ふうふうとみんなで味わうその一椀は大変おいしかったです。

賢治のいた停留所にも、あたたかい帆立の香りがふわっとひろがったことでしょう。しかし賢治はどうにも食べられません。そして高熱はどんぶりの中のスイトンを雲にかえていきます。さらに賢治の食べられず申し訳ない気持ちがゆらゆらと揺らめいて、スイトンの雲はまるでその空間を覆っていくのです。

ああ、やっぱり賢治さんには帆立貝入りスイトンを一口でも味わっていただきたかったなあ。



## 子どもにもおとなにも 賢治さんの透明な力を…

黒猫舎代表 菅 原 るみ子

……雲からも風からも  
透明な力が  
そのこどもに  
うつれ……  
「あすこの田はねえ」の最後の一節である。  
私は、子どもに携わる仕事をしている。子どもたちに、宮沢賢治さんの童話を



読み聞かせするのだが、驚くほど、子どもたちは知らない。わかりにくいやらしいのだ。賢治さんは、子どもをとても愛していたのに、子どもたちは…。

岩手に生まれ育った子どもたちに、岩手の素晴らしい童話作家である賢治さんの作品を読んでほしい、おとなになっても賢治さんの作品にふれる人になってほしい、岩手を出たときに賢治さんの童話の魅力を語れる人になってほしい。そんな思いで始めたのが「黒猫舎」だ。

黒猫舎は、子どももおとなも楽しめる宮沢賢治童話の上演を目指し、平成22年4月に旗揚げした女性だけの劇団である。大道具や衣装を最小限にし、歌や生演奏（植木鉢やワイングラス、竹、炭、日用品も使う）、ダンスなどを織り交ぜることで、視覚や聴覚をとぎすまし、想像力がかきたてられるような舞台創りをめざしている。

「どんぐりと山猫」や「注文の多い料理店」「セロ弾きのゴーシュ」など、誰もが知っているお話から、タイトルは聞いたことがあるが内容が分からない話、読んだことはあるが理解しにくい話など、様々な作品に取り組んできた。これまでには、1公演3作品ずつ公演してきたが、第10回公演には、「銀河鉄道の夜」に取り組んだ。

### 【これまで取り組んだ作品】

オツベルと象・いちょうの実・やまなし・注文の多い料理店・雪渡り・セロひきのゴーシュ・よだかの星・どんぐりと山猫・土神と狐・風の又三郎・狼森と笊森、盗森・鹿踊りのはじまり・フランドン農学校の豚・慶十公園林・月夜でのんしんばしら・とっこべとら子・祭りの晩・銀河鉄道の夜・雨ニモマケズ・星めぐりの歌・精神歌・ポランの広場・牧歌

毎回、会場はたくさんのお客さんで埋まる。驚くことに、下は2歳児から上は80歳代まで、幅広いお客様方が観劇してくださる。まだ小学校に入っていない子どもたちが「楽しかった。」と目を輝かせて帰って行く。小学生が「また来ます。」と手を振って帰る。30歳代のお母さんが、「子どもに観せたくて連れて来ました。」と言う。60歳

代の方が、「孫が観たいと言うので一緒に来ました。」と言う。そんなお客様が、一人や二人ではないのがうれしい。

「銀河鉄道の夜」でも、たくさんの感想をいただいた。

- 優しい感じがした。(小学生)
- 音楽と光で話がよりきれいに感じた。本をまた見て、今日のことを思い出したい。(小学生)
- 眼を離さずに観た。死の場面、そこから、生の大切さを深く感じ、元気をもらった。(30歳代)
- 目と耳と心で、大切なものを感じたと思う。親子でいい時間になった。(40歳代)
- 賢治の「幸せ」「無償の愛」の世界観が表現されていて、素敵なものだった。(40歳代)
- 箱4つから始まるステージ。光と音の織りなす世界。今回も舞台いっぱいに表現する黒猫舎の方々に心を動かされた。生きることはすばらしい、生きる時間が与えられていること

はありがたいと感じた。一緒に銀河鉄道に乗っている…そんな舞台だった。(50歳代)

- どんな現実にあろうと、どんな現状にいようと、「幸せは自分の心が決める」そんな思いを奮い立たせてくれた。今から、自分できることを考えようと思う。(60歳代)
- 失う命の先に、ほのかな希望の光が見える。悲しさを秘めつつ、生きることのすばらしさも同時に感じることができた。(70歳代)

世代を超えて、賢治の世界と一緒に楽しめる空間になっているのだと思ったら、心からうれしい。

黒猫舎は、賢治さんから多くのメッセージをいただいている。賢治さんの温かく、心優しいメッセージを、力強い思いを、賢治さんの言葉を通じて、私たちみんなに伝えたい。

これからも、ずっと…



## 読者の立場 私の

# 宮沢賢治

### 賢治の先見性

鎌倉・賢治の会 高村和夫

岩手山山麓を舞台にした作品「狼森と笊森、盗森」について触れてみたい。入植した翌年の秋、百姓たちの小さな四人の子供がいなくなる狼森事件、三年目には山男による農具隠し事件、さらに次の年には納屋の中の粟がみんな無くなる不思議なこと（ぬすとはたしかに盗森に相違ない…岩手山）が次々と起きる。事件解決の都度、百姓たちは粟餅を森へ届ける。それから森もすっかりみんなの友だちでした。

森（自然）は人間に限りなく豊かな恩恵をもたらす。その反面人間による急速な開発、侵害などの環境破壊が続くと、温暖化などの地球規模の気候変動をもたらし、想定以上の大災害などを引き起す。賢治は森（自然）がこの二つの相貌を持ち合わせていることを熟知したうえで、一見牧歌的な作品にしている。しかし人間の森（自然）への

畏怖の念が急速に薄れて行く傲慢さが警鐘として秘められている。

国谷裕子氏はご著書「キャスターという仕事」（2017年1月岩波新書）で、元国連事務総長特別顧問のアミーナ・モハメッド氏の次の発言を紹介している。「地球は私たち人間なしでも存続できますが、私たちは地球なしでは存続できません。先に消えるのは私たちなのです」。また15年9月の国連総会で採択されたSDGs（持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals）では従来の途上国支援に加え、気候変動など幅広い課題に取り組んでいる。

科学的知見に詳しい賢治は国連で取り組んでいる今日的課題「地球異変」を既に予見し、地球・人間の未来について人一倍心を痛めていたに違いない。

賢治作品に触れ、また賢治の足跡を訪ねることにより、心が豊かになると同時に、スケールの大きさ、先見性の確かさに敬服します。

## ● 賢治さんからの贈り物・谷川俊太郎さんとのご縁

東山・ブドリとネリの会 佐藤郁子

平成7年に当時の東山町が「グスコープドリの町」宣言をし、石と賢治のミュージアムが旧東北碎石工場・太陽と風の家などを中核として設立されてから来年で20年を迎えます。

ブドリとネリの会は昨年亡くなられた斎藤文一先生のご指導で平成13年発足し17年を迎えました。全国の会員の皆様の熱い思いを受け変わらぬ活動を続けております。

さて、昨年のこととなりますが東山町に昭和23年に建立された宮沢賢治詩碑「まづもろともに」の建立70年の記念式典・記念事業を開催し、全国の皆様にお楽しみいただいたことを振り返ってみたいと思います。以前からわたしも含めた会員の中から詩碑の撰文・揮毫を行っていただいた谷川徹三先生のご子息である詩人谷川俊太郎氏をお招きしここ東山で記念イベントを開催したいとの願いを話し合っておりました。偶然にも谷川俊太郎氏と関係を持つイベントアドバイザーと知りあうこととなり、前向きな感触を得たのですが何せ自分たちで大きなイベントを開催したことの無い素人集団で途方に暮れておりました。

こんな時、幸いにも東山町内の地域の団体や文化団体などに声をあげていただき、実行委員会を結成し具体的な活動を開始していただきました。

これが開催のわずか3か月前、昨年の3月のことになります。それからの3か月は石灰事業者などをはじめとする皆様からの協力金の件・入場整理券の件(400席がわずか2時間でいっぱいになりました)、また式典・事業のための会場準備など目まぐるしい忙しさの中にも充実した時間を過ごさせていただきました。6月4日当日朝から雨が降る空模様でしたが、式典開始の頃には晴れあがり、賢治さんが天井から微笑んでいただけたものとの思いを持ちました。記念式典の対談では谷川俊太郎さんとご子息で音楽家である谷川賢作さんによる徹三先生の思い出話、特に揮毫の際に1年もかけたその様子が語られ会場の皆さんはじめ、徹三先生への感謝の思いを更に強くいたしました。詩の朗読とコンサートでは親子の息が合ったステージが繰り広げられ、会場全体が和やかな雰囲気に包まれ本当に夢のような時間を多くの皆さんと共に共有できた喜びでいっぱいでした。また、私自身としましても俊太郎さんとご一緒に多くの場面が多く、本当に幸福なひとときを過ごすことが出来ました。

なお、その日ご子息賢作さんが語られた“私の孫まで入れた谷川家5代で東山へ”は夢ではなく、近い将来に本当に実現したいとの思いをもっておりました。幸いにも賢作さんは今年も9月に東山を訪れ、石と賢治のミュージアムでコンサートを開催することになりました。

## 来館者の声

記帳ノートから

No.380～381

**今** 日は、吹雪です。

「風がどうと吹く」ことの意味が初めて分かりました。温暖な私の地元（神奈川）とは全く違う気候。木々の枝先に鳴きながら吹く風と横飛びに流れ散る雪片。かつて、彼の人はどんな想いでこの景色を眺めていたのでしょうか。

**30** 数年勤めた教職を、昨日定年退職しました。今日はその記念に、昔訪ねた懐かしいここ宮沢賢治記念館にきました。より素晴らしい充実した施設になりましたね。一生の思い出になりました。心より感謝申し上げます。

**雨** ニモマケズの階段を昇ってきました。疲れたけれど、賢治の多才をあらためて感じることができ、本当に楽しい旅になりました！

**「生** 徒諸君に寄せる」と柳原昌悦宛の封書に感動しました。命を燃やし続けた賢治さん。30代でこの世を去ってしまったことが

悔やまますが、これからも賢治さんの想いは引き継がれていくと感じました。文学のイメージが強かったのですが、多分野に渡る活躍を分かりやすく知ることができてよかったです。

**私** は、「雨ニモマケズ」の詩を、今まで数百人の子ども達に暗唱させ、自分の生活の一部としてその精神を見習いたいと考えてきました。今日は、主人と一緒に来館できることに幸せを感じております。賢治の正直な人格に心を打たれ、老い先短い人生を心豊かに生きていきたいと思います。涙が止まりません…

**や** っと来ることができました（佐賀県から）。ここからの眺めは素晴らしい、處十公園林をイメージさせます。賢治の心に抱かれている、そんな場所ですね。人は、自然と共に生きていくのが一番ですね。残りの人生、賢治のように生きることはできませんが、自然と共に生きてていきたいと思います。

**大** 植町から3人で参りました。賢治さん（失礼？）がもっともっと長く生きていらしたら、岩手県はどんなに変わっていたことでしょう。私はいつもそう思っています。偉大なる賢治先生と同じ“岩手県人”それは私の誇り

でもあります。岩手に生まれ育ちよかったです。

**岡** 山から定年退職して初めて東北地方を回っています。賢治は、イメージとしてはとても好きなのですが、作品を読むのがとてもつらい作家です（映画、音楽、アニメ含め）。何がそうさせるのかと、今日考えてみました。20世紀初期の文明論・宗教観が満ちているから？逆に東北とか、自分に無いイメージが強烈すぎるから？

**茨** 城から来ました。今日で3回目です。賢治は、生まれた時代が早すぎたのかなと思ったりします。思想のスケールの大きさは、あの時代の日本人とは思えません。

**友** だちに勧められ宮城から来ました。素適なところですね。一人で來たので、ゆっくりと宮沢賢治の世界観を楽しめました！小6の時、教科書で「やまなし」を読んだ新鮮な感動は今も忘れません。自分も年を重ね、彼が何を目指して、どんな気持ちだったのか、12歳の時よりは分かってきたような気がします。日々の生活で忘れかけていた気持ちが蘇るようです。すてきな展示をありがとうございました。

## ■ 賢治の世界セミナー 2018

宮沢賢治の作品や精神、生き方について学ぶ出前講座を実施しています。

今年は、市内17校（小学校11校、中学校5校、高校1校）18講座（受講者2,595名）を実施する予定です。

年々、体験型・参加型のセミナーの希望が増える傾向にあります。また、内容的には、音楽や演

劇、作品の語りなどの要望が多く、講師の皆さんもさまざまな工夫をして下さっています。



皮切りとなった八幡小学校では、陶作家の中野真紀子さんが、「ひのきとひなげし」にちなみ、ディップアート技法によるひなげしの花の作成に取り組みました。

また、若葉小学校では、萩原陽子さんが、手づくりの大型布絵紙芝居を使った「セロ弾きのゴーシュ」を披露して下さいました。子どもたちは目を輝かせ、賢治の世界に浸っていました。

子どもたちの理解や興味、こだわりにそった作品へのアプローチの多様さを知り、あらためて、このセミナーの意義の大きさを感じました。



## ■ 賢治の世界ワークショップ

### in 胡四王山

4月15日、あいにくの雨降りでしたが、森林インストラクターの高橋修さんを案内人に、胡四王山散策を行いました。「なめとこ山の熊」のこぶしをはじめ、やまなしやヒノキなど賢治作品と関わり付けたお話に、皆さん満足顔の90分間でした。また、カタクリやシュンランなど、見頃を迎えた草花も堪能することができました。

### in 東和・宮守

6月30日には、賢治ゆかりの地を訪ね歩きました。東和の成島三熊野神社、丹内山神社それぞれ



の「祭日」の詩碑等を見たり、「慶十公園林」を思わせる杉林を通ったりと楽しいひとときを過ごすことができました。

お目当てのめがね橋（宮守川橋梁）でのSL銀河のお出迎えも叶いました。幸運なことに、SL銀河と並走する瞬間があり、歓声が上がるなど、車内は大盛りあがりでした。



## ■ 特別展のお知らせ

### 童話「セロ弾きのゴーシュ」

10月14日(日)まで開催しています。

32葉の直筆稿に加え、賢治愛用のチェロ、妹トシのヴァイオリンなどが展示され、連日多くの皆様が来館下さっています。

この間、2度のギャラリーコンサートを開催し、8月4日(土)には、宮澤清六さんの曾孫にあたる宮澤香帆さんが、妹トシのヴァイオリンを実際に弾いて下さいました。（表紙写真）



また、9月2日(日)には、宮沢賢治学会イーハトーブセンター職員林秀さんの軽快なトークとピアノ伴奏にあわせ、チェリスト本田彩香さんが「アベマリア」「トロイメライ」など、『セロ弾きのゴーシュ』にちなんだ曲を奏でて下さいり、賢治に思いをはせるひとときとなりました。



### 童話「雪渡り」

童話「雪渡り」は、雑誌（「愛国婦人」）で発表されたもので、生前の賢治が唯一原稿料をもらった作品としても知られています。

#### 展示期間

平成30年10月20日(土)～平成31年3月31日(日)

※直筆稿の公開 10月20日(土)～28日(日)

※展示室閉室（資料入替）10月29日(月)

#### 展示資料

- ・直筆手入れ稿 童話「雪渡り」一式（全7葉）
- ・「愛国婦人」476号（大正10年12月号）
- ・町田嘉章・浅野健二編「わらべうた」岩波書店
- ・幻灯機
- ・雪沓（藁沓）
- ・封蠟細工（シーリングスタンプ・ワックス）

### \*編集後記\*

ここ胡四王山も炎暑の夏。滴り落ちる汗にまみれ南斜花壇の草刈りをしていると、不思議なことに一瞬涼風が吹くことがあります。木々の隙間から覗く賢治さんが「ご苦労さん」と言ってくれている気がしてきます。そう考えると、ヤマユリやオキナグサなどの草花はもちろん、狸や野ねずみ、かっこうなどこの山の「賢治さんの仲間たち」の訪問にも心が和みます（熊さんは？？）。

「山まるごと賢治さん」のこの地で、賢治さん的心にふれてみませんか。多くの皆様のご来館をお待ちしております。